

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：35310
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22592570
 研究課題名(和文) 感染対策地域ネットワーク構築に向けた地域住民に対する手指衛生教育に関する研究
 研究課題名(英文) A study of hand washing education for the local inhabitants for the construction of infection control network
 研究代表者
 千田 好子 (SENDA YOSHIKO)
 山陽学園大学・看護学部・教授
 研究者番号：10216559

研究成果の概要(和文)：手指衛生行動に関する地域住民の実態を調査し、その問題点を明らかにし、効果的な手指衛生教育プログラムを検討・実施した。その後感染対策地域ネットワークを立ち上げ、住民への普及啓発活動として、手洗いに関するパンフレットを配布した。さらにネットワークメンバーを対象に、エンパワメントに関するアンケート調査を実施した。結果、大学や地区の人々と健康づくり活動について話し合いたい、等の項目が特に高くなっていた。

研究成果の概要(英文)：We investigated the actual situation of the local inhabitants on hand-washing behavior. Based on findings, we made effective hand-washing educational programs and carried it out. And we constructed the infection control network with the local inhabitants. As spread enlightenment activity, we distributed pamphlets about the hand-washing to inhabitants. Intended for network members, we conducted a questionnaire survey on empowerment further. Result, they want to talk about health promotion activities with people of the district and university, items, etc. was especially high.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域看護学

キーワード：感染対策、地域ネットワーク、手指衛生教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、多剤耐性菌の出現、新興・再興感染症などグローバル化した感染対策において、地域連携の必要性が高まっている。厚生労働省は2004年、院内感染対策支援ネット

ワーク構築のモデル事業を開始したが、その後の活動状況は必ずしも十分ではなく、感染対策地域ネットワークの構築は喫緊の課題となっている。

(2) 地域を包括した感染対策に関する研究

は数少ない。本研究で、感染予防に向けた地域住民への手指衛生教育を継続的に実施し、感染対策地域ネットワークを構築することは、極めて独創的であるといえる。継続した教育と啓発活動により、地域連携、ネットワークの強化も期待でき、それがひいては地域全体での危機管理にも寄与することになり、意義深い研究であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究期間内に、地域全体で感染症対策ネットワークを構築するために、以下の具体的な目的について検討する。

- (1) 地域住民に対する手指衛生行動に関する検討（4歳から90歳までのA学区連合町内会住民の手指衛生の実態調査と問題点の抽出）
- (2) 手指衛生教育プログラムの作成およびその適用、評価（細菌学的評価）
- (3) 感染対策地域ネットワークの構築

3. 研究の方法

(1) 研究期間：平成22年11月～平成25年1月

(2) 研究場所：A学区内幼稚園、小・中学校、学区内諸団体および山陽学園大学

(3) 方法：

- ①地区住民の手指衛生行動の実態調査
- ②手指衛生教育の実施と教育効果の検証
- ③検体（バームスタンプ）のコロニーカウント
- ④データ分析
- ⑤感染対策地域ネットワークを構築
連合町内会および諸団体、公共施設等との感染対策連絡会を開催し、感染対策地域ネットワークを構築する。さらに、学区の住民主体のネットワーク活動の展開について、コミュニティ・エンパワメントのプロセス評価を行う。

4. 研究成果

(1) 手指衛生教育プログラムの開発に向けた幼児の手洗い行動に関する実態調査

B幼稚園児96人を対象に、家庭における手洗い行動について質問紙調査を実施した。結果、一般に洗い残しが多いとされる拇指・手首は、本調査でも洗えていない児が多かった。また、固形石けんより液体石けんの使用割合が高く、中には泡タイプの使用もあることから、今後泡タイプの有効性を明確にしていく必要がある。正しい手洗い習慣を身につけるために教育と訓練は必要であり、手洗いの方法・手順、手洗いミス防止などを考慮した、幼児期からの教育の重要性が示唆された。さらに3・4歳児に対し、自主的な手洗い行動を促すための方略を検討することが課題となった。

(2) 手指衛生教育プログラムの開発に向けた地域住民の手洗い行動に関する実態調査

高校生以上のA学区住民510人に無記名自記式質問紙調査を実施した。465人(91.2%)から回答があった。仕事の開始前・後、鼻水をぬぐった時、おやつの前および動物をさわった後に、手洗いをする者の割合は5割以下であった。また、「殆ど・全く」洗わないと答えた部位は、手首(41.7%)と拇指(24.1%)が多く、手洗いを実施する理由は、汚れを取り除く(70.8%)や雑菌を取り除く(74.6%)が多く、感染を予防するは58.3%であった。過去1年間に手洗い教育を受講した者は36人(7.7%)であった。これらの結果から、地域住民に対する手指衛生教育の必要性や、正しい手指衛生行動の習慣化を目指した教育プログラムの開発が必要となった。

(3) 手指衛生教育プログラムの開発に向けた中学生の手洗い行動に関する実態調査

C中学校1年生107人、2年生87人の計194人を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。中学生の手指衛生実施率には低い項目があり、また手洗いの必要性を十分理解していないことが分かった。手洗い方法では、一般に洗い残しが多いとされる手首や拇指は、本調査でも洗えていない者が多かった。また、多くの生徒は手指衛生に関する教育を受けて無く、手洗いは面倒で洗いたくないと思うなど、手洗いの動機付けができていないことが示唆された。手洗い手技に加え、洗い残し部位のブラックライトでの確認や、手指細菌を培養するなど、手洗いの必要性を生徒が視覚的に理解し、自発的に行動できる教育プログラムを開発することが課題となった。

(4) 中学生に対する手指衛生教育効果の検証

C中学生に対する手指衛生教育実施6ヶ月後にアンケート調査により、その教育効果を検証した。「手洗いを実施する場面・理由、手洗い方法」とも教育前に比べ、教育後に高い評価が得られたことから、一応の教育効果が認められた。「食事前に手を洗う」「手洗いをする理由の1つに目に見える汚れを取り除くことである」などは教育前より有意に高率であったが、半年前に実施した手指衛生教育を覚えている者は7割に満たなかった。今後地域ネットワークを作り、継続的な手指衛生教育を実施する必要性が示唆された。

(5) 小学生の手洗い感想文の分析による手指衛生教育効果の検討

D小学生330人を対象に手洗い教育実施後書いてもらった感想文を、テキストマイニングを使用し分析した。各学年とも「視覚的教材」に関する記述が多かった。これは、手指

衛生教育にブラックライトを使用し、洗い残しを視覚的に確認したことが、強く印象に残ったと考えた。また、学年が進むとともに、手指衛生に関する重要キーワードが増え、手指衛生の意義・方法、今後に向けた手指衛生行動までに感想内容が深まっていた。今回手指衛生教育の一応の効果は認められたが、今後児童の発達段階に応じた教育方法を検討する必要性が示唆された。

(6) 感染対策地域ネットワークの構築

A 学区連合町内会役員と、本研究者による感染対策地域ネットワークを構築した。ネットワークメンバーに対して手指衛生教育や情報交換会等を行う中で、エンパワメントに関する調査を前後 2 回実施した。小山らの「健康推進員のエンパワメント評価尺度」を改変し、自記式質問紙調査(13 項目、各 5 点満点)とした。4 人(回収率 40.0%)より回答があった。結果、エンパワメントの項目のほとんどの得点が 1 回目より 2 回目が高く「地区の人々に健康づくり活動に参加してもらいたい」は 4.0 点から 5.0 点となった。これらから、感染対策地域ネットワーク活動等により、メンバーの健康課題解決への意識が高まることが示唆された。つまり、大学と地域が協働することにより、感染対策等健康普及啓発活動が促進される可能性が見出された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 中田涼子、安達耐子、伊丹古都絵、林由佳、福川京子、中尾美幸、千田好子、手指衛生教育プログラムの開発に向けた地域住民の手指衛生行動に関する実態調査、山陽看護学研究会誌、査読有、Vol.2,NO.1,2012,10-12
<http://www.sguc.ac.jp/>
- ② 安達耐子、伊丹古都絵、林由佳、福川京子、中尾美幸、千田好子、感染予防に対する地域住民の認識－感染予防で困っていること、工夫していること－、山陽看護学研究会誌、査読有、Vol.3、NO.1,2013,20-22,
<http://www.sguc.ac.jp/>

[学会発表] (計 5 件)

- ① 千田好子、手指衛生教育プログラムの開発に向けた幼児の手洗い行動に関する実態調査、第 37 回日本看護研究学会学術集会、平成 23 年 8 月 7 日、横浜市
- ② 千田好子、手指衛生教育プログラムの開発に向けた地域住民の手洗い行動に関する

実態調査、第 2 回山陽看護学研究会集会、平成 23 年 9 月 10 日、岡山市

- ③ 千田好子、手指衛生教育プログラムの開発に向けた中学生の手洗い行動に関する実態調査、第 31 回日本看護科学学会学術集会、平成 23 年 12 月 2 日、高知市
- ④ 千田好子、中学生に対する手指衛生教育効果の検証、第 38 回日本看護研究学会学術集会、平成 24 年 7 月 7 日、宜野湾市
- ⑤ 千田好子、小学生の手洗い感想文の分析による手指衛生教育効果の検討、第 32 回日本看護科学学会学術集会、平成 24 年 11 月 30 日、東京都

[その他]

ホームページ等

<http://www.sguc.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千田 好子 (SENDA YOSHIKO)
山陽学園大学・看護学部・教授
研究者番号：10216559

(2) 研究分担者

中尾 美幸 (NAKAO MIYUKI)
山陽学園大学・看護学部・准教授
研究者番号：00316026
林 由佳 (HAYASHI YUKA)
山陽学園大学・看護学部・講師 (H24 から准教授)
研究者番号：20553978
福川 京子 (FUKUKAWA KYOUKO)
山陽学園大学・看護学部・講師 (H24 から准教授)
研究者番号：30554216
中田 涼子 (NAKATA RYOUKO)
山陽学園大学・看護学部・助教
研究者番号：80554229
(H24 から削除)
伊丹 古都絵 (ITAMI KOTOE)
山陽学園大学・看護学部・助手 (H24 から助教)
研究者番号：60554251
(H23 から追加)
安達 耐子 (ADACHI TAEKO)
山陽学園大学・看護学部・助手
研究者番号：80613778
(H23 から追加)

(3) 連携研究者

()